ファニーカートグランプリ

四神　夏菊

　ミドルガーデン

「はあ、最近ちょっとした休憩時にここに来ちゃうなー。」

テイルスはミドルガーデンのフカフカの芝生の上に座って空を見ていた。
綺麗な青空が広がる空を眺めながらのんびりしていた。

「空が綺麗だなー」

テイルスが黄昏ていると後ろからさわやかな風が吹いてきた。

「なーにやってるんだテイルス。」
「あ、ソニック。」

テイルスの後ろにはいつの間にかソニックが立っていた。

「ちょっと休憩込みでのんびりしてるんだよ。」
「じゃあ俺もっと。」

ソニックはテイルスの横に寝転んだ。

サワサワ・・・

「花の香がいいなー。」
「そうだねー」

二人は一時のさわやかな時間を過ごしていた。
だが、

バサ！

「！　何だ？」
「どうしたのソニック？」

テイルスがソニックの方へ向くとソニックの顔にはチラシが張り付いていた。

「チラシ？」
「みたいだな。何々。」

ソニックはチラシを取って読み始めた。

『このチラシを被った貴方は超ラッキー！　数日後のとあるレースグランプリの出条件を手に入れました！　レースに参加しながらバカンスを楽しめます！　優勝商品は豪華物品を用意！
さあ、チームメイトを集めてレースに参加しよう！』

「レースグランプリ？」
「しかも出場用のチケットみたいだな。」
「でも何のレースグランプリなの？」
「別の島での大きなグランプリみたいだな。」

ソニックはチラシを見ながら言った。

「面白そうだね。ちょうど暇を持て余してたんだし。」
「だな、走りで俺に勝てると思ってるのか？」
「ソニック、走るのはマシンだよ。ソニックじゃなくて。」

テイルスはチラシを見て言った。

「わかってるって。」
「カートを作ってそれで参加するみたいだね。」
「マシンか、テイルスが中心で作ってくれよな。」
「うん。えっと参加人数は４人～６人で１チームみたいだよ。参加チケット一枚で１チーム参加できるみたいだね。」
「俺とテイルスをまず入れたらあと３、４人だな。」

「ナックルズやエミーなら出られるかな？」
「あとストレンジャーも誘ってみようぜ。」
「じゃあ僕はストレンジャーに声をかけてくるからソニックはナックルズとエミーを誘って。集合場所は僕の工房でいいかな？」
「ＯＫ！、Ｈｅｗｕ　Ｗｅ　ＧＯ！」

ソニックはいつものスピードで走っていった。
テイルスはトロピカルアイランドへ向かって飛んでいった。

　エンジェルアイランド

テイルスと分かれたソニックはナックルズのもとへ向かっていった。

「おーい、ナックルズ、いるかー？」
「何だソニックか、どうしたー」

ナックルズは祭壇から降りてソニックのもとへ。

「ちょっと面白いゲームの参加チケットがあるんだ、参加してみないか？」
「面白いゲーム？　なんのだ？」
「レースゲームだってよ、たまたま参加者に当たったみたいなんだ。」
「ソニックが？まじかよ。」
「マジだ、で、もちろん参加するよな？」

ソニックはナックルズに詰め寄る。

「だが俺にはマスターエメラルドがあるんだぜ。」
「エメラルドなら持って行けばいいだろ。」
「そんな簡単に言うけどな。」

「あー、じれったいわね！」
「！！」

ソニックの後ろに少し息切れしたエミーがいた。

「なーにうじうじ言ってるのよ。　そんなのテイルスに任せておけばいいでしょ！」
「またすごい案だな。つかエミー、なんで入るんだ？」

息切れしているエミーにソニックは問いかける。

「もち　ソニックに会いに来たに決まってるでしょ。そしたらソニックが通りすぎたから追いかけてきたのよ。アー疲れた。」
「オマエも暇だな、じゃあオマエは参加すんのかよ。」
「ソニックが行くなら私も行くに決まってるわよ。ナックルズ、あんたも来なさいよ。」
「何で！」
「せっかくのバカンスなのよ！？　どうせ守ってるけど暇なんでしょ。だったら来なさい！」
「だが、」
「まだ逆らうき？　いい度胸ね。」

エミーの右手にはピコピコハンマーが握られている。周りには脅しのオーラが出ている。

「ナックルズ、平和に行きたいんならＯＫしとけ、ケガしちまうぜ？」
「・・・　わーったよ！　参加すればいいんだろ！　参加すれば！」

半分やけでナックルズは折れた。

「じゃあ決定だな。」
「で、どこで会議をするんだ。」
「テイルスの工房だ、もうテイルスもストレンジャーに交渉して帰ってるんじゃないか？」
「ストレンジャーも強制参加か？」
「強制かは本人しだいだな。」
「ソニック、ストレンジャーって誰？？」

エミーは不思議そうに聞いた。

「ああ、エミーはまだ会ってなかったっけ。まあ、テイルスが一番親しい友人って所かな。」
「ふーん。　まあ速い所行きましょ。」
「そうだな。」

ソニックとナックルズとエミーはテイルスの工房へ向かっていった。

　テイルスの工房

「テイルス、帰ってるか？」

一番に着いたソニックがドアを開けた。

「あ、お帰りソニック、早かったね。」
「ナックルズを先に誘いに行ったらエミーも来たんでな。」
「ソニックー、乙女を置いていくなんて酷いわよ。まったく。」

一足遅れてナックルズとエミーがやって来た。

「ああ、わるかったなエミー。」
「エミーも大変だね。」
「まあ風と同じソニックに付いていくなんてほとんど無理だけどな。」
「いいの！！ソニックについていくのが私のポリシーなの！」
「わかったわかった。」

「ずいぶんとにぎやかだな。」

工房の入り口でにぎやかにしていると部屋にいたストレンジャーが出て来た。

「皆そろったみたいだな。テイルス。」
「うん。」

「？　そちらの方とはまだ会ってなかったな。」

ストレンジャーがエミーを見ながら言った。

「誰？」
「ああ、エミーはまだ会ったことが無かったね。ストレンジャーだよ。ストレンジャー、あの人はエミー。」
「始めまして、ストレンジャー。」
「こちらこそエミー。」

エミーとストレンジャーは挨拶した。

「とりあえず玄関じゃ何だから中に入ってよ。」
「お邪魔しまーす。」

３人は中に入っていった。

「で、ソニック、本件の方はまだ話さないのか？」

ナックルズは机に置いてあったカットフルーツを食べながら言った。

「ああ、そうだったな。ストレンジャーはテイルスから聞いたか？」
「大体は聞いた。まあどの道その話にはＯＫを出しとくぜ。」
「じゃあ、話を始めるか。」

ソニックは持っていたチラシを出した。

『参加日時は４日後。初日の場所のホワイトアクロポリスがある島に集合すること。』

「ホワイトアクロポリスはここから南だな。トロピカルアイアンドを越してもっとの所だな。」
「そこまではカレントでいけるね。」

『チームメイトは参加者とマシンを調整する人が入って６人以内。』

「調整は僕がやるね。」

『マシンは各チーム１台でそれを１チーム内で使っていく。』
「レースは一人で参加か。」

『計８コース走って脱落しなかった１チームが優勝。』
「システムは普通ね。」

『マシンに内臓されていいのはアクセル、ブレーキ、ハンドル当のみ。ハンドル技術が問われます。他の追加機能はつけないこと。』
「うーん。ちょっと手厳しくなってきたね。」

『グランプリではサーキット内の仕掛けのみで走ること。』
「どんな仕掛けがまってるのかしらね。」

『なお、気間中は脱落者以外はリゾート施設内での有意義な一ヶ月をお楽しみ下さい。』
「すごいな。」

『優勝商品は大会までのお楽しみ。』

「わくわくしてくるわねー」
「とりあえずマシンを開催前日までに作らないといけないみたいだな。大丈夫かテイルス。」
「任せて。使いやすいマシンを期間内に作るから。」
「任せたぜ。」
「じゃあ、お楽しみは１週間後か。」
「今のうちにバカンスの用意、しておかなくっちゃ♪」

エミーはうきうき気分で言う。

「グランプリはそっちのけだな。」

ナックルズは言う。

「とりあえず腕を磨いておこうぜ。」
「そうだな。」
「じゃあ、おれはテイルスの手伝いでもするかな。」
「うん。お願いねストレンジャー。」
「チーム名はソニックチームだな。」
「あ、ずるいぞソニック。」
「硬いこというなってナックルズ。」

一週間後にレースを控えてソニック達はうきうきしていました。
優勝商品をいただくために。

一続く一

おいしいスープと月明かりの実

　テイルスの工房　地下エリア

テイルスはストレンジャーといっしょに工房の地下エリアへと降りてきた。

「今日は何をするんだテイルス。」
「今日はとりあえず設計図から書こうかな。」

テイルスは設計図を描くときに使う机から大き目の模造紙を取り出した。

「俺は何が出来るかな。」
「そうだねー　じゃあ、夕食とかをお願いできるかな。」
「了解、なんか作ってくるぜ。」

ストレンジャーは地下エリアを出て食材を探しに出て行った。

「今日からいそがしくなりそうだなー」

テイルスは設計図用の紙に設計図を書き出した。

　マリンコースト上空

一方、テイルスに夕食を頼まれたストレンジャーはトロピカルアイランドに向かって飛んでいった。
時間帯は夕方。ちょうど夕日が海に入りそうな角度だった。
そんな中、ストレンジャーは島へと飛んで行った。
しばらく飛んでトロピカルアイランドへ

「何かおいしそうなフルーツ、無いかな。」

ストレンジャーはバスケットを片手に島を歩いていた。

「何だ？」

ストレンジャーが歩いているとあまり見慣れない植物が生えていた。
木にはりんごのように月が生えていた。

「こんなの生えてたっけ？　食べれるかな？」

ストレンジャーは木の実をひとつ取って皮ごと食べた。
中は繊維がしっかりしてシャキシャキの甘さ控えめの味だった。

「結構おいしいな。　もって行ってみるか。」

ストレンジャーは名前がわからない気の実をたくさんとっていった。
あと他のフルーツやジャガイモ、ハーブを摘んで島へ戻っていった。

　テイルスの工房

ストレンジャーはちょうど日が暮れた頃に戻ってきた。
手には食材の入ったバスケットを持っていた。

「さて、頑張って作ってみるかな。」

ストレンジャーは工房のキッチンへ。

トントントン・・・

「ストレンジャー、何やってるんだ？」

ストレンジャーが料理をしていたらソニックがやってきた。

「ソニック、こんな時間帯にどうしたんだ？」
「ちょっと走ってきたんだ。眠くはなかったから。」
「そうなんだ。」

「で、そっちは何やってるんだ？」
「テイルスに頼まれて夕食のスープを。」

キッチンの厨房にはなべにスープが入っていた。

「煮えたらフルーツを刻んで持っていこうかなって。」
「フルーツ？　おお、結構おいしそうだな。」

机の上においてあったバスケットの中を見るソニック。

「パイナップルにイチゴにブドウ。？これは？」

ソニックは例の月のフルーツを出した。

「ああ、それは島に生えてた奴なんだけど、名前は分からないんだ。」
「見知らぬフルーツか。」

ソニックは月のフルーツを食べた。

「おお、結構上手いな。しかも結構甘い。」
「あれ、そんなに甘かったか？」
「ああ、甘いぜ。」

ソニックは食べながら言った。

「摘んだ時は甘さは控えめだったみたいだったけどな。」
「なら食べてみなって。」

ソニックがストレンジャーの口にかじったフルーツを入れた。

シャクシャク・・

「あ、本当だ、さっきより甘い。」
「そうなのか？」
「ますます変わったフルーツだな。」

二人はフルーツを見ながら言った。

「ナックルズなら知らないか？このフルーツ。」
「そうだな、俺達よりフルーツは詳しそうだな、聞いてみるか。」

ソニックはフルーツを一つ持って出て行った。

「おっと、そろそろ煮えたかな？」

ストレンジャーは味見しつつハーブで香をつけていった。

「フルーツも切らないとな。」

フルーツをカットして盛り付けをして出来上がり！

「よし、テイルスの様子でも見てくるか。」

ストレンジャーは地下エリアへと下りて行った。

　エンジェルアイランド

ソニックは月のフルーツを片手にナックルズの元へ。

「ナックルズー」
「ソニック、どうしたんだこんな時間に。」

ナックルズは祭壇から降りてきた。

「ちょっと聞きたい事が合ってな。」
「何だ、珍しいなオマエが俺に聞くなんて。」
「このフルーツ、なんていうのか知ってるか？」

ソニックは持ってきたフルーツを出した。

「お、月明かりの実じゃん。」
「月明かりの実？」
「ああ、新月の日が近いと勝手に実る木があるんだ。それに実るのがその月明かりの実。」
「そうか、もうしばらくすると新月になるもんな。」

ソニックは空を見ながら言った。

「でもこの実はなかなか見つからないんだぜ。よく見つけたな。」
「いや、俺じゃなくてストレンジャーが持ってきたんだ。」
「となるとトロピカルアイランドに実ってたのか。」
「結構甘くて上手いんだな。これ。」
「新月の日の夜だと神秘な味だって聞いたことがあるぜ。夜だと甘くて昼だと苦いって。」
「神秘の味か、食べてみたいな。」
「俺も食べたことが無いんだ、ちょっとくれ。」

ナックルズはソニックにもらって実を食べた。

「おお、甘いな。しかも程よくすっぱさがある。」
「すっぱいのが追加されたか。俺が食べたときはすっぱい味はしなかったから。」
「そうか、で、ストレンジャーはどこにいるんだ？」
「今はテイルスの工房でスープ作ってるぜ。何だ、食べに行くのか？」
「スープもあるのか、じゃあなおさら行くかな。」

ナックルズは走って向かっていった。

「おい、エメラルドはどうするんだ？」
「おっといけね。」

ナックルズはエメラルドを持って島を降りた。
するとエメラルドの効力が無くなった島は落ちた。

「いいのか？」
「とりあえず自分の下にあればいいんだ。行くぜ。」

ナックルズはエメラルドをもってソニックと工房へ向かっていった。

　テイルスの工房、地下エリア

「テイルス、調子はどうだ？」
「あ、ストレンジャー、今設計図が出来た所だよ。」

机には設計図が書き込まれた紙があった。

「じゃあ、休憩込みで食事しなよ。」
「うん、そうするよ。」

テイルスは紙を丸めて近くのポケットに入れ、工房へ向かっていった。

「おお、テイルス、終わったのか？」

工房にでたらソニックとナックルズが部屋にいた。

「ソニックにナックルズ、どうしたのこんな時間に。」
「ナックルズが食事をゴチになりに行こうって。」
「月明かりの実が目当てだけどな。」
「月明かりの実？なーにそれ？」
「このフルーツの名前がわかったのか。」

ストレンジャーはバスケットから実を出した。

「ああ、ナックルズがどうしても食べたいらしくてな。」
「スープもだがな。」
「じゃあ、用意するから待っててよ。」

ストレンジャーはキッチンへ向かっていった。

「スープとフルーツのディナーなんておしゃれだね。」
「そうだな。」

「お待たせ。みんな。おいしいかは食べてみてからだぜ。」

ストレンジャーはスープの入ったお皿を運んで持ってきた。

「メニューはポテトのポタージュとカットフルーツだぜ。」
「おお、おいしそうだな。」

お皿のスープからは湯気が出てさらにおいしそうに見せていた。

「じゃあ、早速。」

全員「いただきます！！！」

「おお、上手い！」
「本当だ、おいしいよストレンジャー。お料理上手だね。」
「そうか？　よかった喜んでもらえて。」
「本当においしいぜ。」
「おかわりお願いしてもいいか？ストレンジャー。」
「速いな、ナックルズ。」
「ＯＫ。」

４人はテイルスの工房でスープとカットフルーツを食べて楽しく過ごしていた。
月明かりの実はさらにおいしくなっていて４人は積んできたのを全部食べてしまった。
そして工房が静かになった頃、皆はテイルスの工房で寝ていたのであった。

ー続くー

たまには気分転換を

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

大会開催日まで残り　３日

昨日のディナーの後で一晩過ごしたソニック達。
そんな中早めに目が覚めたテイルスは地下エリアに下りて一人黙々と作業をしていた。

「えっと、ここはこれで、ここは、こうだね。」

カチャカチャカチャ・・・

「ようテイルス、早いな。」
「あ、ソニック、おはよう。」
「お、結構進んでるんだな、ってことはあんまり寝てないんじゃないか？」
「ううん、結構寝たよ？　作業はちょっと前から始めた所だもん。」

テイルスの前には骨組みだけのカートがあった。

「だったらいいが、あんまり無理すんなよ。」
「うん、ありがとうソニック。」

テイルスは笑顔で答えた。

「とりあえず工房へ来いよ、ストレンジャーが朝飯作って待ってるぜ。」
「もうそんな時間？　あ、本当だ。」

机の上の時計は８：００を指していた。

「もう１時間たってたんだ。」
「そういうことだ、行こうぜ。」
「うん。」

テイルスとソニックは工房へ戻っていった。

「よいしょ。」
「あ、お帰りテイルス、ソニック。」

ソニックとテイルスが地下エリアから戻るとストレンジャーが出迎えた。

「朝飯、出来てるぜ。」
「ありがとう、ストレンジャー。」
「ナックルズはまだ寝てるのか？」
「ああ、まだ寝てるぜ。」

ソニックとテイルスはソファに寝てるナックルズを見ながら言った。

「起こすのもなんだから先に食べるか？」
「そうだね。」

ソニックとテイルスとストレンジャーは朝飯を先に食べ始めた。

「今日の朝ごはんはトーストとフルーツだぜ。」
「おいしそうー」
「ではお先に。」

３人　「いただきまーす。」

モグモグ・・・

「そういえばテイルス、今日は一日作業するのか？」
「そうだね、先にカートの方を作ってカレントをちょっと手を加えてカートが乗れるように直し

ておかないとね。」
「結構スケジュールが決まってるんだな。」
「まあ頑張ってやりなよ。でも、あんまり無理はすんなよ。」
「うん、」

「ごちそうさま。」
「おいしかったー」

ストレンジャーは食事に使った皿等を片付け始めた。

「じゃあ、僕は地下ルームでまた作業をしてくるね。」
「ああ、頑張ってな。俺もしばらくしたら見に行くから。」
「ＯＫ。」

テイルスは地下ルートへのはしごを降りていった。

「メカの調整を全部テイルスに押し付けちまったけど、頑張ってるな、テイルス。」
「そうだね、ハイ、食後のハーブティ。」
「おお、サンキュー」

ストレンジャーはカップに注いだハーブティをおいた。

「でも、テイルスが頑張ってくれてるから俺らはこんなに暇なんだけどな。」
「少しぐらいは手伝ってあげられればいいんだけどな。」
「ストレンジャーは結構役に立ってるじゃないか。ちゃんとテイルスの事をきずかってやってる。俺もなんかできればいいんだけどな。」
「少しは俺らも手伝ってみるかな。メカ以外でも出来ることはあるんだろうし。」
「そうだな。」

ソニックとストレンジャーはハーブティを飲みながら話をしていた。

「それにしても、」

ふぁあ・・・

「オマエはのんきだなナックルズ。」
「あ、何のことだ？？？」

寝ぼけ眼をこすりながらナックルズは言った。

「別に何でもねーよ。」

ソニックは少し笑いながら言った。

「ナックルズ。朝ごはんあるけど食べる？」
「おう、いただくぜ。」

ナックルズはソファから起きてキッチンへ来た。

一方、テイルスはそんな会話を知らずに黙々と作業を続けていた。

そしてしばらく時間が過ぎて、お昼時。

「よし！、完成！！」

地下エリアにいたテイルスは完成し声を上げていた。

「あとはカレントを少し改良しなくっちゃ。」
「テイルス、お昼が出来たけどどうする？？」

ストレンジャーが地下エリアへやってきた。

「あ、ストレンジャー、もうお昼？」
「ああ、ずっと熱心にやってたから気付かなかったか？」

「えへへ、多分そう。あとカレントを少し改良するからお昼はあとでいいかな。」
「そういうと思ってほら、」

ストレンジャーは持ってきたバスケットから弁当を出した。

「今日のランチはサンドイッチだからここで食べてもいいぜ。」
「本当？　ありがとうストレンジャー。」
「いいってこれくらい。カレントの改良なら手伝えるかな。いいかな？」
「じゃあお願いしてもいい？」
「もちろん。」

ストレンジャーはテイルスといっしょにメカの改良をし始めた。

そして時間が経つこと１時間

「ふぅ、大体出来たな。」
「うん、ストレンジャーが手伝ってくれたから少し早く終わりそうだね。」
「結構進んでるみたいだな。」

ソニックとナックルズも地下エリアにやってきた。

「おお、新しいカートも大体出来てるんだな。」
「カレントの方も順調か？」
「うん、多分明日には出来ると思うよ。」
「だったら少し休憩でもしたらどうだ？」
「俺達がつんできたフルーツを持ってミドルガーデンに。」
「いいな、テイルスはどうする？」
「うん、僕も行きたいな。」
「じゃあ決定だな、そうと決まったら行こうぜ。」
「うん。」

テイルスとストレンジャーはメカを置いておいて休憩に入ることに

ソニック達はミドルガーデンへと向かっていった。

　ミドルガーデン

ミドルガーデンに着いたソニック達、時刻はもう夕方だ。

「綺麗な夕日ー」

テイルスは崖の向こうの海に入りかけていた夕日を見て言った。

「時間帯がちょうど夕方だもんな。」
「風も気持ちいいな。」

ミドルガーデンには安らかな気持ちにさせてくれそうな香を風が運んで雰囲気はバッチリ！

「じゃあ持ってきたフルーツ、食べようぜ。」

ナックルズは持ってきたバスケットに入っていたフルーツを取り食べ始めた。

「そういえば何のフルーツを持ってきたんだ？」

ストレンジャーはバスケットの中を見ながら言った。

「トロピカルアイランドに生えてたフルーツをたくさん取ってきたんだ。もちろん、月明かりの実もだ。」
「いただきまーす。」

テイルスはりんごを取って食べ始めた。

シャクシャク・・

「おいしい！！」
「さすがトロピカルアイランドのフルーツだな。」

ストレンジャーはオレンジを食べながら言った。

「風景もバッチリだね。」
「あとはディナーでもついたら最高だな。」
「じゃああたしの持ってきたパン、食べる？」
「あ、エミー、きてたの？」

ソニックの後ろにエミーが立っていた。

「テイルスの工房に差し入れに行こうとしたら４人が出かけようとしてたんだもん、付いてきたのよ。」
「差し入れ？」
「そうよ、パンをたくさん焼いてきたのよ、良かったら食べて。」

エミーは持ってきたカゴを差し出した。

「ありがとうエミー。」
「いろいろ入ってるな。」
「こんなに作ったのか？」
「男だけじゃ何食べてるかわからないもの、それなりの物を作ってみたのよ。」

エミーは４人の輪に加わった。

「でも俺達昨日からマシなもん食べてるぜ。ストレンジャーがいろいろ作ってくれたから。」
「そうなの？すごーい、男の子でも料理する人がいたんだー　ソニック達とは違うのね。」
「そんな事ないと思うけどな。あれくらい。」

パンを食べつつストレンジャーは話す。

「でもスープもサンドイッチもトーストもおいしかったよ？ね、ソニック、ナックルズ。」
「ああ、おいしかったぜ。」
「いつもあんなの作ってるのか？」
「毎日違うけどそれなりのものは。」
「へええ、私も食べてみたかったなー」

エミーは感心しながら言った。

「良かったら来て下さいよ、また帰ったら作りますから。」
「そう？やった♪」

エミーは喜びながらソニックに抱きつく。

「じゃあソニックと今日は泊まりに行っちゃおうかな？」
「おいエミー。はなれろって。」

エミーはソニックの腕にくっついて離れない。

「おーおー、おあついこって。」
「違うって！」
「じゃあ、また寝床作らないとな。」
「そうだね、」

ソニック達は夕焼けの光を浴びながら楽しく話して過ごした。
早めのディナーを終えて５人は工房へと帰っていった。

ー続くー

競技用のメカの完成

　テイルスの工房

ソニック達はミドルガーデンでのディナーを終わらせテイルスの工房に戻ってきた。
戻ってきたときにはもうすでに夜だったので５人は早く寝て明日に備えました。

大会開催前日

「う、うーん。よく寝たー」

一番早く起きたのはテイルス。
ベットに座りながら大きく伸びた。

「明日大会だからメカの調整とテストしないとね。」

テイルスはベットから出てメカエリアに通じるマンホールから下へ降りていった。

「ふぁあ、朝か・・」

しばらくしてから起きたのはソニック
体を起こして辺りを見回した。
いつもと変わらないテイルスの工房内の風景と寝ているナックルズ、エミー、ストレンジャーがいた。
だがテイルスだけいない。

「テイルス？」

ソニックはテイルスがいつも寝るベットに向かっていった。

「もう起きてメカエリアに行ったかな。」

「う、ううん。」

ソニックが振り返って見るとストレンジャーが目を擦りながら体を起こしていた。

「あ、わりい、起こしちまったか？」
「おはようソニック。そんな事ないよ、いつもこれくらいの時間帯に起きるから。」
「そっか、ならいいけど。」
「テイルスは？」

辺りを見回しながらストレンジャーは言った。

「もう起きてメカエリアに行ったんだと思う、ベットにいないから。」
「そっか、大会前だから早めに起きたのかな。」
「多分な。」
「うーん、」

ストレンジャーは体を伸ばしながら寝ていたソファから出た。

「じゃあもう少し、テイルスやソニック達のために食事を作るかな。」
「ああ、頼むストレンジャー。」
「何が食べたいソニック。」
「そうだな、じゃあスクランブルエッグとトーストがいいな。」
「ＯＫ。」

ストレンジャーはそういってキッチンへ行った。
とりあえず一人になったソニックは朝の日差しを浴びに外へ出て行った。

一方テイルスは一人メカエリアでカレントとカートに手を加えていた。
二つのメカを少しずつ交互に調整しながら時間を潰していた。

場所が戻って地上のテイルスの工房内
ストレンジャーが朝ごはんを用意していた。
ソニックにリクエストされたとおりにスクランブルエッグを作っていた。

ジュージュー・・・

「ううん、あら、いい香。」

起きたのはエミーだった。

「誰が作ってるんだろう。」

エミーは寝ていたソファから出てキッチンへ向かっていった。

「ストレンジャー？」
「あ、おはようエミー。」

ストレンジャーはいつもどおり料理をしていた。

「いつもここで料理してるの？」
「いいや、いつもはトロピカルアイランドの小屋で過ごしてるから。ここしばらくはテイルスに頼まれたのもあるからここで作ってるんだ。」
「そうなの。で、今日の朝食は何？」
「ソニックにリクエストされてスクランブルエッグを作ってるんだ。」
「あたしも何か手伝えない？」
「じゃあパンを焼いてもらえるか？」
「いいわよ。」

エミーはカットされた食パンを取ってトースターに入れた。

「あとはお皿ね。」

エミーはそういって食器棚からお皿を取り出した。
そしてお皿をテーブルに並べた。

「よし、こっちは出来たからのせちまうぜ。」
「ＯＫ。」

二人は５人分の朝食を用意していた。

ガチャ。

用意していたら工房のドアが開いた音がした。

「ふぅ、やっぱり朝方のランニングはいいなー」
「あ、お帰りソニック。」
「起きたばっかりなのにもう走ってきたの？」
「エミー、起きてたのか。　二人で用意してたんだ。」
「私はたいしたことはしてないわよ。お皿並べたりパン焼いたりしてたぐらいだけど。」
「でも俺は結構助かったぜ。」
「そう？」

ガシャン。

「あ、ちょうどパンも焼けたから朝食にしようぜ。」
「おう、テイルス呼んでこようか。」
「私も行くー」

ソニックとエミーはテイルスを呼びにメカエリアへ向かっていった。

そして場所が変わってメカエリア

「うん、これで両方終わりだね。」

テイルスは二つのメカを見ながら言った。

「テイルス。」
「あ、おはようソニック、エミー」

「どうだ、メカの方は。」
「うん。両方とも終わったからあとは試乗して試すだけだよ。」
「早いわねー。」
「じゃあ朝飯食わないか？　ちょうど出来た所だから。」
「うん。いいよ。」

テイルスはソニックとエミーについて工房に戻って行った。

そしてまた戻ってテイルスの工房

ガコン。

工房のマンホールが開いた。

「戻ったぜストレンジャー」
「お帰り３人とも。」
「ナックルズは？」
「まだ寝てるぜ。」

ストレンジャーは寝ているナックルズを見ながら言った。

「起こすか？」
「いや寝てるなら寝かせとけ。」
「わかった。じゃあ食べようぜ。」

４人はテーブルに付いた。

「いただきまーす。」

今日のメニューはトーストとスクランブルエッグと昨日の残りのフルーツ少々。

「うん、おいしいー」
「本当、おいしいわね。ストレンジャーはいつも料理してるの？」
「いつも一人だからな、料理ぐらいは出来ないとな。」
「へえ、すごいわね。」

エミーはそういいながらトーストをパクリ。

「そうそう、皆ちょっといい？」

テイルスは言った。

「今カートとちょっと改良したカレントが出来た所なんだ。良かったら乗ってみてくれない？」
「おお、出来たのか、どんなのが出来たんだ？」
「それは見てからのお楽しみー」
「楽しみだな。」

「ごちそうさまー」
「じゃあメカをとってくるから外で待ってて。」

テイルスは一人、メカエリアへ向かっていった。

「じゃあかたすかな。」
「あ、ストレンジャー私がやっとくよ。」
「ああ、悪いな、頼む。」
「ナックルズそろそろ起こすか。」

ソニックはナックルズを起こしに行った。

「あ、そうだストレンジャー。」
「ん？何？」
「ちょっと面白いこと思いついたから耳貸して。」

ソニックはストレンジャーにナックルズを面白く起こす計画を思いついたのでちょっと密談をし

始めた。

「いいな？」
「いいのか？そんな事して。」
「いいからいいから。」
「ならいいけど・・」

ソニックとストレンジャーは移動してナックルズの近くに立った。

「いいか？」
「おう。」
「アクアブレス！」

ポコポコポコ・・・

ストレンジャーは口からシャボン玉を大量に出した。

「よし、」

ソニックは手に持っていた針でバブルを一気に割り出した。

パパパパパパパパン！！！

「うわ！」

ナックルズは飛び起きた。

「ようやく起きたなナッコーズ」
「いったいどういう起こし方すんだ！」

少々起こり気味のナックルズ。

「わりいわりい。」
「ソニックが面白い起こし方を思いついたからって。」
「おかげで一気に目は覚めたけどな・・」
「とりあえず朝食たべるか？」
「ああ、もらうぜ。」
ナックルズは変わった起こし方をされたがそこまでは怒らず朝食を食べ始めた。

そしてしばらくしてナックルズの朝食が終わり、４人は工房の外へ出た。

「ここに居ろって言われたけど。」

ソニックがそういった瞬間、

ガコン！

「？？」

足元から音がした。

「ちょっと揺れてるな。」
「少し下がるぞ。」

ソニックがいうと皆は少しバックした。
ソニックの判断は正しく、地面がわれ始め下からメカとテイルスがやって来た。

「みんな、お待たせー」

テイルスの横には少し大きめのカートが乗っていた。

「これが僕の作ったレース用のカート　エブリィだよ」
「すごーい。」
「結構おしゃれじゃない。」
「スピードもそれなりのものなのか？」

「うん。重さもほどほどにしてスピードが出るようにしてあるよ。とりあえず皆に乗ってもらってカートの操縦に慣れてもらえるといいんだけど。いいかな？」
「ああ、いいぜテイルス。」
「じゃあとりあえずソニックから乗ってもらえる？」
「ああ、わかった。」

ソニックはカートに乗り込む。

「右のがアクセルで左のがブレーキだよ。」
「あとはハンドルで操作するだけなんだな。」

ソニックはハンドルを左右に回してみる。

「じゃあとりあえずやってみて。」
「ああ、」

ソニックはアクセルを踏み込んだ。

ブオーン！！

ソニックは少し強めに押したらしくスピードが出てそのまま走っていく。

「ソニックー踏みすぎー」
「よっと。」

キキキキキ！！

カートは右に曲がりながら戻ってくる。

ブーーーン

「あんなんで大丈夫かテイルス。」
「ソニックのことだからすぐなれると思うんだけど。」

そしてしばらくソニックが運転して約１時間経過。
テイルスが言ったとおり、ソニックの運転が良くなりスムーズに進んだりカーブを曲がったりしていた。

「ソニックー、戻ってきてー」

テイルスが言うとカートが戻ってきた。

「おうテイルス、どうだった？」
「やっぱり上達が早いね。もうなれた？」
「ああ、多分な。」
「じゃあ皆に変わってくれる？」
「おう」

ソニックが降りて今度はナックルズの番。

「あんまり踏みすぎないでね。」
「ああ、わかってる。」

グ！

ブーーーーーン！

「うお！」

ナックルズを乗せたエブリィはすっとんで行った。

「ナックルズー」
「あいつも踏みすぎたな。」
「ちょっと改良した方がいいかなー」
「でも重すぎると逆にダメだしな。」
「加減がわからないんじゃない？」

「んなのんきなこといってないでアドバイスしろ！」

ナックルズが戻ってきた。

「ゴメンゴメン、改良点があるなーって皆で話してたから。」
「それに乗ってる人がコツをつかまないとなんともな。」
「まあ、それもそうだな。」

ナックルズは納得してまた運転再開。そのまま進んでいった。

「それなりにハプニングがつき物だな。」
「そうだね。」

そしてナックルズが終わったらエミーとストレンジャーが運転して今日は終わった。

「本番は明日だね。」
「レースを楽しもうぜ！」
「勝つのは私達よ！」
「全部上位で行こうぜ！」
「ソニックチームは優勝をいただくよ！」

オー！

皆で言ったあとソニック達は工房へ戻って明日に備えたのでありました。

ー続くー

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

大会当日の朝
朝日が海から顔を出した頃
テイルスの工房のメカエリアからエンジン音がしていた。

「よし、皆のった？」
「こっちは準備ＯＫだぜ。テイルス。」
「早く行きましょ。」
「ＯＫ、じゃあ行くよ？　カレント、発信！」

メカエリアから飛び出したカレントはホワイトアクロポリスがある島へと向かっていった。

　ホワイトアクロポリス

ミスティックルーインからホワイトアクロポリスへ進むこと約２時間

「皆ー　ホワイトアクロポリスが見えてきたよー」

運転しているテイルスは後ろの席に座っているソニック達に言った。

「もう少しで付くから降りる準備してねー」

カレントはそのままのスピードで島まで向かっていった。

島まで行くと警備員がやってきた。

「いらっしゃいませ！　ようこそ、ホワイトアクロポリスへ。　招待状をお持ちですか？」
「えっと、ハイ。」

テイルスはソニックから借りた招待状を変わりに出した。

「はい、確かに。　では移動用で来た船は４番ポートへお止め下さい。　船から下りましたら中央の庭園へお越し下さいませ。」
「わかりました。」

警備員は去っていった。

「じゃあとりあえず４番ポートへ行こう。」
「ＯＫ。」

ソニック達とカートを乗せたカレントは４番ポートへ向かって行った。

そして４番ポートでカレントとカートを置き、中央の庭園へと向かっていった。

「やっぱり結構参加者がいるねー」

庭園までの道のりでもレースの関係者らしき人たちが大勢歩いていた。

「全９チーム×４～６人のメンツがいるんだもんな。」
「ってことは最大で５４人もいるんだね。」
「すごい大掛かりだな、このグランプリ大会。」
「あ、ついたわよ。」

ソニック達が庭園の前のゲートを抜けるとそこにはこのグランプリの参加者達がいた。

「すごい！こんなにいろんな人たちがいるんだな。」
「これは争いがいがありそうだな。」
「そうね。」
「・・・」
「ストレンジャー？　どうしたの？」

テイルスが他の方を見ていたストレンジャーに声をかけた。

「あ・・・　いや、なんでも無い。」

「？」
『さっきの人、彼女に似てたな。　気のせいか。』
ソニック達はそのまま中央へ向かっていった。

そして庭園の中心にあるステージ前までやってきた。
ステージにちょうどのタイミングでピンクのドレスを着た女性がやってきた。

「皆さん！　今回は私が主催するファニーカートグランプリにようこそ！　おいでくださいました！！」

「わーーーーーー！！」(歓声)

「今回のグランプリの参加資格を手に入れた全９チーム皆さんがこの会場にいらっしゃいます。もうし遅れましたが私は今回のグランプリを主催させてもらいましたピーチと言います。では一通りこのグランプリの説明を行いますね。」

そういうとピーチ姫の後ろのスクリーンには写真等が映し出された。

「まず、皆さんにはレースに参加しつつ１ヶ月をこの島で過ごしていただきます。ですがこのレースで最下位に落ちてしまったチームは即、このグランプリから脱落になります。そして脱落をしなかった１チームには賞品とカップを送らせていただきます！」

説明をしていたピーチ姫は左手に大きめの金のカップを掲げた。

「レースは明後日から第一レースを始めますのでその間はサーキットの下見や買い物などゆっくり過ごしてくださいね。では私はこれで。」

ステージに上がっていたピーチ姫は護衛とともにステージを後にした。

「へえ、あんなに綺麗な人がこのグランプリの主催者だったんだね。」
「ちょっとビックリだな。」
「ソニックー　この後早速ショッピングへ行きましょうよー。」

エミーはソニックの腕を取りながら言った。

「えー、俺はホテルで休みたいんだけど・・」
「いいじゃない、一ヶ月もあるのよ？　寝て過ごすなんてもったいないわ。早く行きましょ☆」

エミーに引っ張られながらソニックは連れていかれた。

「じゃあホテルでね、ソニック。」
「ああ、またな。」
「ナックルズはどうするの？」
「俺は先にホテルに戻ってるよ。少し休みたいし。」
「うん。わかった。」
「テイルスはどうするんだ？」
「僕は初日のサーキットを見てこようと思うんだ。ストレンジャーは？」
「俺はテイルスといっしょにいるよ。することが無いからな。」
「じゃあいこ。」

ソニックとエミーはショッピングへ
ナックルズはホテルへ
テイルスとストレンジャーは初日のサーキットの下見で、それぞれ中央の庭園を後にした。

　オーロラアイスフィールド

テイルスとストレンジャーは始めのレースで使われる『オーロラアイスフィールド』へやってきた。

「ちょっと寒いねー」

テイルスとストレンジャーの息は白くなっていた。

「ああ、寒いのはちょっと苦手なんだが・・」

「あ、着いたよ。結構大き目の場所だね。」

一面氷のステージで昼なのにもかかわらず少々寒い。

「このステージのルールは何だって？」
「ちょっと待ってね。」

テイルスは持ってきていたパンフレットを見た。

「えっと、ここは、特に何も無くって、ハンドルテクニックで勝負するみたい。時間はお昼から。」
「寒いのが平気な人が乗ったほうがよさそうだな。」
「そうだね。夜はオーロラがすごいみたい。」
「眺めは最高・・・」
「どうしたの？」

テイルスはストレンジャーが向いている方向へ向いた。
そこには膝丈までの赤いドレスを着た鳥が立っていた。髪はリボンで止められて後ろ髪になっている。

「あの人がどうかしたの？ストレンジャー。」
「いや、ちょっとな。」
「？」

その鳥はそのままどこかへ歩いていった。

「ちょっと俺先に帰ってるな。」
「う、うん。」

ストレンジャーは鳥の後を追いかけて行った。

「とりあえず、写真とっとこ。」

テイルスはカメラを片手にサーキットの風景を撮りにいった。

一方、分かれたストレンジャーは赤い鳥を追いかけていた。
相手は歩いていたのですぐに追いついた。

「すみません。」
「？」

赤い鳥は振り向いた。

「あの、どちら様ですか？」
「これ、見たこと無いか？」

ストレンジャーは付けていたリストバンドを取って中から水晶を出した。

「！　これ。」
「やっぱり、見たことがあるか？」
「ええ、じゃあ貴方もこれを知ってますか？」

赤い鳥はリボンにつけてあった水晶を取った。

「別名、『再会の兆し』だったな。アルドール。」
「よかった、覚えてたのねストレンジャー。」

アルドールと呼ばれた鳥は微笑んだ。
ストレンジャーはクリスタルをリストバンドにはめ、手につけなおした。

「でもどうして君がここにいるんだ？」
「たまたまここを通りかかったの。空から飛んできたから。」
「そうなのか。」
「ストレンジャーはどうしてここにいるの？」
「オレはここで開かれてるレースの参加者なんだ。」
「そうだったの。」

ストレンジャーとアルドールは仲良くベンチで話をしていた。

「行く先が無いんなら俺といっしょに来ないか？」
「ストレンジャーと？」

「ああ、今は昔と違って別の友人も出来たんだ。このレースにもその人達が誘ってくれたんだ。」
「ストレンジャーがいるってことはピスフリーとジョイは？」
「いや、時々別の島を回って探してるんだがまだあってないんだ。でも、どこかで元気にやってるよ。きっと。」
「そうね。じゃあその人たちにあってみてもいいかな。」
「ああ、いいぜ。」
「ありがとう、ストレンジャー。」

ストレンジャーはアルドールを連れて宿泊予定のホテルへと行った。

　ホテル　サンプライズ

ストレンジャーはアルドールを連れてホテルまでやってきた。
ここのホテルには今回のレースの参加者のみが泊まっている。
設備はよく、一部屋に二人の割合で泊まっている。

「ここだ、アルドール。」
「うわぁ、すごいホテル、こんな所に泊まるの？」
「ああ、多分ナックルズは部屋にいると思うんだが。」

ストレンジャーはカウンターへ行き部屋番号を聞きに行った。
アルドールはロビーのソファに座って待っていた。
しばらくするとストレンジャーが戻ってきた。

「俺の部屋は９０１号室だ、とりあえず行こうぜ。」
「うん。」

ストレンジャーとアルドールはエレベーターで部屋に向かった。

　９０１号室

「ここだな。」

カチャッ

「お邪魔しまーす。　うわぁ！　すごい！」

先に入ったアルドールは驚きを隠さずそのまま言った。
部屋は綺麗なつくりで結構ひろびろしていた。

「すげえな、こんないい部屋で泊まれるのか。」
「ストレンジャー、外もいい眺めだよ。」

アルドールは部屋の奥のバルコニーでストレンジャーを呼んでいた。

「どれどれ。おお！」

外は一面海でちょうど夕日が海に落ちようとしていた。

「もう夕暮れだったんだな。」
「でも綺麗・・・」
「おっと、こんなことしてる場合じゃなかった。アルドール、みんなの所へ行くぜ。」
「う、うん。どこの部屋にいるの？」
「この階全部が俺達のチームの部屋だってさ、それぞれ１フロアずつで貸しきってるんだと。」
「すごいわねー」

ストレンジャーとアルドールは隣の部屋へ。

　お隣９０２号室

コンコン、
カチャッ・・・

「だれだー」

ナックルズが部屋から出てきた。

「どうも、ナックルズ。ソニック達はいる？」
「ああ、ソニックならいるぜ。　おいソニック。」
「どうしたナックルズ。」
「ストレンジャーが呼んでるぜ。」

ナックルズに呼ばれ、ソニックが部屋から出てきた。

「おう、ストレンジャーどうした？」
「ソニック達に合わせたい人がいるんだ、今いいか？」
「いいぜ。」
「アルドール、いいって。」

ストレンジャーがいうとストレンジャーの後ろにいたアルドールが出てきた。

「始めまして、アルドール・スパロウって言います。」
「俺はソニック　ソニック・ザ・ヘッジホッグだ。」
「俺はナックルズ・ザ・エキドゥナだ、よろしく。」
「よろしくお願いします。」

３人は挨拶をした。

「ストレンジャーとはどういう関係なんだ？」
「昔からの友人です。」
「そうか、で、本題はなんだストレンジャー。これだけじゃないだろ？」
「まあな。アルドールを俺達のチームに入れたいんだ。いいかな？」
「俺らだけじゃそれは決められないぜ。その件はとりあえず全員そろってからだ。テイルスが帰ってくるまでまってろよ。」
「わかった。」
「とりあえずエミーにも挨拶しとけ。」

「了解。」

その隣９０３号室

コンコン、

「誰ー？」

カチャッ

「あ、ソニック、ナックルズ、ストレンジャー、どうしたの？」
「エミーに合わせたい人がいるんだ。」
「後ろの人？」
「ああ、アルドールっていうんだ。アルドール、彼女はエミーだ。」
「始めまして、エミーさん。」
「こちらこそアルドール。」

チン！

「皆何してるの？そんな所で。」

テイルスがエレベーターから降りてきた。

「あ、テイルス。お帰り。」
「あれ？　さっきの人じゃん。知り合いだったの？」
「さっき？」
「ああ、さっきオーロラアイスフィールドにいたとき、アルドールを見かけたんだ。」
「そうだったの。」
「アルドールっていうの。始めまして、僕はテイルス。」

「始めましてテイルスさん。」
「とりあえずこんな所じゃ何だから多目的ルームに行こうよ。」

　同階　多目的ルーム

多目的ルームへ移動した６人はさっきまでソニックに話していたチームへの参加とあらすじを説明していた。

「なるほどねー、別に僕は構わないよ。皆は？」
「ああ、俺も別にいいぜ。」
「俺もだ。」
「私も構わないわよ。」

全員の意見が一致で決定した。

「じゃあ決まりだな。」
「よかったな。アルドール。」
「うん、皆さん、ありがとう。」
「じゃあ後で本部へ連絡しておかないとね。」
「そうだな。」
「部屋は私といっしょの部屋でいい？アルドール。」
「ええ、お願いします。エミーさん。」

６人が話していると館内放送がかかった。

『参加者の皆さん、本日のディナーは先ほどのガーデンでお食事をご用意しましたので、そちらでどうぞお食べ下さい。』

「だってさ、行こうぜ。」
「ＯＫ。」
「どんなのが食べられるのかしら。」
「楽しみだねー」

６人はいっしょにエレベーターに乗って中央の庭園へと向かっていった。

「それでは皆さん、よい夜をお過ごしくださいませ。」

６人「カンパーイ！」

「レースは明後日だね。」
「結構強いやつと争えそうだな。」
「どんな人がいるのかしらね。」
「とりあえず頑張ろうね。」

皆は話をしつつバイキング形式の豪華なディナーを堪能し、楽しい夜を過ごしました。

ー続くー

悪友の参加

　ホテル　サンプライズ　第一レース初日の朝

ホワイトアクロポリスの島の海から太陽が出た頃。
レースの参加者であるチームメイトたちは皆それぞれ起床し始めていた。
もちろんソニック達も。

「う　うーん、よく寝たー」

一番早く起きたのはテイルス。
ベットの上で体を伸ばし、ベットから出てテラスの方へ

「今日もいい天気、レースには持って来いだね。」
「うーん。」

同じ部屋で寝ていたストレンジャーも目覚め、体を起こした。

「あ、おはようストレンジャー」
「おはようテイルス。今日はいい天気だな。」
「うん。外は涼しいくていい気候みたいだよ。」
「そうみたいだな。」

ストレンジャーもベットから出てテラスの方へ。

「せっかく早起きしたんだし、少し空でも飛ばないか？」
「うん。いいよ。」

テイルスとストレンジャーは靴を履き、自室のテラスから空へと飛んでいった。

「うーん。やっぱり空は気持ちいいなー」

翼を大きく広げ豪快に飛ぶストレンジャー

「そうだねー、風が涼しい。」

テイルスは尻尾を回転しつつ空を進んでいく

「あ、あそこ第一レースの場所じゃない？」
「そうみたいだな、でも上から見ると結構広いな。」

テイルスとストレンジャーは上空からのオーロラアイスフィールドを観察していた。

「やっぱり少し寒いな。どうりで夜にオーロラが出来るはずだ。」

ストレンジャーは寒そうにしながら言った。

「あんまり長居はしないほうが良さそうだからそろそろ戻ろっか。」
「そうだな。」

二人は仲良くホテルへ戻っていった。

「よう二人とも、ようやくお出ましか？」
「あ、おはようソニック、ナックルズ。」

ホテルへ戻ると隣の部屋のテラスからソニックとナックルズが二人を出迎えた。

「二人仲良く空の散歩か？　優雅だなー。」
「結構朝方だから涼しくって。思わず飛び出しちゃったんだ。ね、ストレンジャー。」
「ああ、誘ったのは自分だけどな。」
「もうすぐ朝飯の時間だって言うからしたくしてきなよ、俺達はエミーとアルドールを起こしてくるから。」
「うん、わかった。」

二人は自室へ戻り、身支度をし始めた。

数分後・・・

身支度バッチリ、いつものテイルスとストレンジャーが部屋から出てきた。
廊下ではソニック達が待っていた。

「おまたせ皆。じゃあ行こっか。」

６人はエレベーターで一階のレストランへ向かっていった。

下に付き、レストランの方へ向かっていった。
入り口には何人かの人たちが列を作っていた。

「少し早めに来たんだけど結構いたね。」
「そうみたいだな。ん？」

ソニックはレストランの入り口に立っている人を見ていた。

「どうしたの？ソニック。」
「あれ、エッグマンじゃないか！？」

ソニックが指を指した方向を見るとなんとエッグマンが順番待ちをしていた。

「げ！、あいつも来てたのかよ！」
「やーん、サイヤクー」
「でも何でいるんだ？？」

とりあえず列に並ぶソニック一行。
エッグマンの後ろに付きソニックが声をかけた。

「おい、エッグマン」
「？！　げ！！ソニック！お前らなんでここに！！」

エッグマンは振り向く先にいたソニック達に動揺していた。

「それはこっちのセリフだ！　テメーこそここで何やってんだ！？」
「このレースの招待状を受け取ったからに決まってるじゃろ！」
「盗んだ、の間違いじゃないのか？」

ナックルズは質問しつつエッグマンに詰め寄る。

「失礼なことを抜かすな！　ちゃんともらったんじゃわい！」
「はいはい、わかったわかった。」

少々赤面しつつ言うエッグマンを沈めるソニック。

「でも誰と来たの？　エッグマン。」
「ワシとデコーとボコーとシャドウとルージュじゃ。」
「シャドウとルージュも来てるの！？」

またまた驚くソニック達。

「まーた厄介なチームメイトを連れてきたなエッグマン。」
「手ごわいのばっかりだな。」
「テイルス、誰だそのシャドウとルージュって。」
「私も気になってたんだけど。」

ストレンジャーとアルドールはテイルスに聞く。

「そっか２人は知らなかったね。話すと長くなるけどあのね・・・・」　「で、他のチームメイトはどこにいるんだ？」

テイルスが２人に説明している間もソニック達は列を進みつつ質問する。

「まだあいつらは寝とるわい。レースは夕方からじゃからな。」
「じゃあオマエだけなのか。まあいいけど。」
「何がいいんじゃい。」

「こっちの話だから気にすんなって。」
「まあいいわい、まあせいぜいビリッけつにならんように頑張るんじゃな。フォーッフォフォフォ。」

高笑いしながらエッグマンはトレーをもらって行ってしまった。

「地味一にムカつくなあのマッドサイエンティスト。」
「同感だ。」
「あんなのに負けてられないわ！」

「・・・・って言うわけ。」
「なるほどな。」
「よくわかったわ。」

テイルスはようやく説明し終えてソニック達の方の会話も終えていた。
その後６人は食事を取り部屋へ戻っていった。

　９階　多目的ルーム

「でもまさかエッグマンたちが来てるとは思わなかったね。」
「まったくだ。」

多目的ルームへ戻ってきた６人は作戦会議をしていた。

「でもシャドウとルージュは強敵ね。」
「ああ、エッグマンより手ごわいからな。」
「とりあえず今日のレース、誰が出る？」
「いちよう来た日と今日下見に行ってきたんだけど、とりあえず寒さに強い人がいいと思うぜ。あそこのステージ寒いのが取り柄みたいなもんだから。」

ストレンジャーはテイルスの撮ってきたレース会場の写真を見ながら一通り説明した。

「じゃあまずオレから行くぜ。」
「大丈夫か？ソニック。」
「任せとけって。初回は派手に飾ってやるからよ。」
「じゃあお願いねソニック。」

第一レースはソニックが参加することになった。

「とりあえずもう一回オレが会場の写真とかで情報を集めてくるからテイルスとソニックはメカを頼む。」
「ＯＫ、任せてよ。」
「了解だ。」
「私達はどうすればいい？ストレンジャー。」

指揮をとっているストレンジャーにエミーが問いかける。

「他の参加者もこれからカートとかを出すと思うからその辺の情報を集めてくれ。もちろん、エッグマンの所もだ。」
「了解、任せて。」
「じゃあそれぞれ解散だな。」

ソニック達はそれぞれ夕方までに出来る限りの情報収集とメカの整備に当たった。

そしてソニック達は別々に行動すること数時間・・・・

夕方　レース開始一時間前

「ソニック、テイルス。」
「あ、ストレンジャーおかえりー」

ストレンジャーはレースの会場の再度の下見を終えソニック達のいるメカ整備ルームへやってきた。

「どうだカートの方は。」
「うん、ソニックが使いやすいように整備して、ちょうど終わった所だよ。」
「オレ好みでスピードをつくようにしてもらったんだ。」
「タイヤの滑り止めは大丈夫か？会場は全部アイスリンクだったから。」
「いちようそこは手をうってあるよ。タイヤに小さめのトゲをつけてあるから難なく走れるようにしてあるよ。」
カートのタイヤにはちいさな銀のトゲが均等についていた。
「じゃあ大丈夫そうかな。」

話をしていると部屋の入り口が開き、誰か入ってきた。

「あ、いたいた、ソニックー」

メカ整備ルームにエミー、ナックルズ、アルドールが入ってきた。

「お帰り３人とも、どうだった？エッグマンの方は。」
「あっちもあっちでゴツイのを用意してたぜ。」

帰ってきたナックルズたちもそれぞれが報告をした。

「レースに参加するのはエッグマンさんだそうですよ。」
「エッグマンが相手か、まあまあだな。」
「ボディが黒だから見ればすぐわかると思うわよ。」
「もうカートは出して会場へ向かっていったぜ。」
「あ、本当だ、もう時間だね。」

部屋にかかっている壁時計は試合２０分前を示していた。

「じゃあ私達もそろそろ」
「出陣だね。」

ソニック達はカートに乗り込みエレベーターで下へと降りていった。
地上へ付くとそのままカートを走らせ、オーロラアイスフィールドへ向かっていった。

ー　続く　ー

　オーロラアイスフィールド

ソニック達は少し改良したエブリィに乗り初回のレース会場であるオーロラアイスフィールドへ向かっていた。

「到着ー」

テイルスはそういうと一回カートを停止させ、皆を下ろした。

「じゃあ僕とソニックはとりあえずカートの格納庫へ行ってくるから皆は観客席で待っててね。」

そういうとテイルスとソニックはそのまま格納庫へ向かっていった。

「じゃあ俺らも行こうぜ。」

ナックルズ達は観客席へ向かっていった。

一方皆と別れ格納庫へ向かうテイルスとソニック

「ここだね。」

通路を進むと格チーム名の書かれた扉があった。

「俺らのチームはどこだ？」
「ええっと、あ、ここじゃない？」

カートに乗ったまま進んでいくと『ソニックチーム』とかかれた張り紙が張ってある扉までやってきた。
ソニックは先に進み、扉の開閉ボタンを押した。

「よし、気よつけていれろよ。」
「うん。」

テイルスは前向き駐車で入れた。

「オーライ、オーライ、ストップ！」

ソニックの指示でカートは停車。

「後はレースが始まるまで待機だね。」
「そうだな。」

二人は話していると部屋の上部に付けられていたモニターがＯＮになった。

『レースの参加者の皆様、まもなくレースの開始になりますのでドライバーの方は乗車のスタンバイをお願いします。出来ましたら前方の扉を開けてそれぞれ指定位置にお並びください。』
「ようやく熱いレースの開始だな。」
「うん、頑張ってねソニック。」

ソニックは壁に掛かっていたゴーグルを取り装着した。
テイルスは扉を開けカートを指定の位置へとめた。
一方変わって観客席のナックルズ達。

「お、ソニック達が出てきたぜ。」
「え！、どこどこ！？」

ナックルズが言うとエミーは持ってきた双眼鏡を覗きながらソニックを探した。

「ほら、一番後ろのガレージから出てきたカート。」
「あ！　ソニックだ～♪」

エミーはカートではなくゴーグル着用のソニックを凝視する。

「それじゃあまるでソニックの追っかけみたいじゃないか。」
「でもそれだけソニックさんが好きなんですよね。」
「もちのろんよ♪」

エミーはストレンジャーとアルドールにピースをしながら言った。

『会場の皆様、大変お待たせしました。ただいまより第一レースの開幕です！』

会場にアナウンスが響き渡ると会場の人たちが歓声を上げた。

『レース開始の前にまずは参加者のドライバーとカートの紹介をさせてもらいます！！』

ステージの中心からライブカメラを取り付けたバルーンが出てきた。

『まずは第一コース、チームプロフェッサーのリーダー、ＤｒエッグマンとＢＰ号！』

マイクで言うと映像が出てエッグマンが手を振っていた。

「げ、エッグマン第一コースかよ。」

ナックルズがぼやく中、次々と参加者のチーム名、ドライバー、カート名が挙げられた。

『そしてラストの第９コース、ソニックチームのリーダー、ソニックとエブリィ号！』

カメラはソニックとカートの近くに立ってるテイルスを移した。

「きゃ～～！！　ソニック～～～～♪♪♪」

「エミーうるさい！！」

一人騒ぐエミー、静める前に怒るナックルズ。

『さて、全チームのドライバーを紹介した所でドライバーの方々はカートのスタンバイをお願いします。』

戻ってソニックとテイルス

「スタンバイだってソニック。」
「ＯＫ、今回の一位はオレがもらってくるぜ。」
「うん、頑張ってね、ソニック」

ソニックはカートに乗り込みゴーグルを装着した。
テイルスはカートから離れガレージの方へ。

『では、みなさん、レースの開始です！！』

『３』
『２』
『１』

『スタート！！！』

いっせいにカートのアクセルが踏まれ、レースがスタートした。

『さあ始まりましたファニーカートグランプリ！　参加者のカートが続々とスピードを上げ、一位になろうと皆さん争っています！』

進行報告を特別席のピーチ姫のおつきのキノピオがライブカメラを通して報告をしていく。

『さあまずトップに躍り出たのはゼッケン１、ＢＰ号！その後に続々と他のカートが接近していきます！』
「ち、エッグマンがトップか、コレは負けられないな！！」

カートを操縦しているソニックは舌打ちをしつつ、スピードを上げる。

『おおっと後方からゼッケン９番、エブリィ号がすごい追い上げ！！　一気に二人抜きました！

！だがこの先はおそろしい急カーブ！　皆さんはどうやって潜り抜けるのか！』
「コレくらいなら！！」

ソニックは急ブレーキをかけ、そのままドリフトしつつカーブのＩＮコースを進む。

『おおっとコレはすごい！！エブリィ号！　見事なドリフト捌きで一気に２位へ躍り出た！！！
　そのまま一位めがけて突き進む！！』

会場内はデットヒートに包まれ、そのままの順位でラストの一周へ入った。

『さて順位はずっと変わらず！、このままＢＰ号が一位になるのか！！！』
「そろそろ仕上げじゃな。」

エッグマンは軽く踏んでいたアクセルを踏み込む。

『おおっとＢＰ号！、二位との差を引き離すべくさらにスピードＵＰ！！　他の参加者も続々と
ラストスパートに入った！！！』
「このままじゃ負けるな、ん？」

ソニックはカートを操縦しつつステージの前方を見た。
前方は山なりのコース、左には壁とゴールのゲートが見えた。

「逆転してやる！！！」

ソニックは右に移動しつつスピードを上げた。

『おおっとエブリィ号！、操縦をミスったのか徐々に壁へ向かっていく！このままでは激
突だ！！！』
「ここだ！！」

ソニックは山なりの少し手前で急ブレーキをかけ車体を右方向へ回転しつつ壁を登った。

『おおっと神業炸裂！！、エブリィ号ショートカットをし一気に一位！！　ゴールは目の
前だ！！！』

「行くぜ！！！」

車体が着地したのと同時に一気にソニックはアクセルを踏んだ。

『ゴーーーーーーーーーーーール！！！！！！！！　第一レースの勝者はソニックチーム
だ！！！！！』

会場内は歓声に包まれた。

「きゃーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！　ソニックーーーーーーーーーー！！！！！！！」

「ヨッシャ！一位だ！」
「ソニックさんすごい！！」

そして第一レースは終わり、ナックルズ達はソニックの元へ。

「ソニックー！！かっこよかったーーー☆」
「すごかったなソニック。」

エミーはソニックに抱きついた。

「よせってばエミー。」
「おめでとうソニック。」
「おめでとうございますソニックさん。」
「すごかったよーソニックー」

皆はそれぞれソニックへ一言言った。

「皆、一位もらってきたぜ！」
「イエーーーー！！」

ソニック達は勝利を分かち合い盛り上がっていた。しかし。

ドカーーーーーーーーーーーン！！！！

「！！！！」
「え！、何！！！」

急に外から爆発音と地響きがした。

「いったん外へ！」

ソニック達はガレージから外へ出た。
すると前方から大きな煙が上がっていた。

「何が起こったの！？」
「ストレンジャー、これって！？」
「ああ、いやな予感がする！」

ストレンジャーは空へと飛んで行った。

「ストレンジャー！？」

テイルスは後を追って空へ飛び出した。

ストレンジャーはソニック達の所から５ｋｍほど離れた上空に飛んでいた。

「どうしたの！？ストレンジャー？」
「テイルス、まずいことになったみたいだ。」
「え？」

ストレンジャーが指差した方角をテイルスは見た。
するとそこには大砲を積んだ大型の船が何船もやってきていた。

「侵略軍だ。」

ストレンジャーは船をにらみつつ、そうつぶやいた。

ー続くー

事態の深刻化と決断

　ホワイトアクロポリス上空

ソニック達が白熱したレースを繰り広げていたが急にやってきた大型の船の襲来に参加者全員が混乱していた。

「ストレンジャー、侵略軍って。」
「簡単に言うと『島を奪いに来た者たち』だ。」

ストレンジャーはそう言うとソニック達の下へ戻っていった。
テイルスも後に続いて戻っていく。

「ストレンジャー！」
「どうなってたんだ！？」

ソニックたちは戻ってきたストレンジャーに詰め寄る。

「今は話している時間が無い。とりあえず、やって来たのは敵だ。」
「そんな！」

『キャアアアアアーーーーーー！！！』
『姫ーーーーーーーー！！！』

ソニック達は急に聞こえた悲鳴の元を見た。
するとそこには敵の首領に近い大型の人がピーチ姫を片手にステージ裏へと逃げていった。
キノピオ達はその場から動けず、オロオロしていた。

「大変！！、ピーチ姫が！」
「事情は後だ。　一刻を争う事態が起きてる。急がないと！」
「まって！ストレンジャー！！」

ストレンジャーが先に行く中、アルドールは追いかけていった。

「俺達も言った方が良さそうだな。」
「急ぎましょ！！」

ソニック達も追いかけていった。

　ホテル　サンガーデン

ピーチ姫を連れた敵はホテルへと走っていた。

「待て！！！」

ストレンジャーは敵の少し前方へ降り立った。

「ここから先は行かせない！！」
「何！！」

敵は驚きながらも停止した。

「くそ！！、生き残りが居たのか！！」
「何だって！？」
「ストレンジャー！！」

アルドールもストレンジャーの元へ。

「ちっ！！」

敵はストレンジャー達を大きな跳躍で飛び越えた。

「逃がすか！　アイスブレス！！！」

ストレンジャーは相手の着地地点めがけてブレスを放った。

「くそ！！」

敵は足を氷に完全に取られ、動けなくなった。

「ピーチ姫は返してもらうぜ！」

遅れて到着したソニック達が敵を囲んだ。

「ちっ。」

敵は舌打ちしつつ脱出すべく足を懸命に動かしていた。

「逃がさねーよ！！」

ナックルズは敵の腹めがけてパンチを打ち込む。
体制の崩れた敵からアルドールはピーチ姫を敵から奪い返した。

「オマエには聞かないと行けない事があるんだよ。」
「逃がすわけにはいかないわ。」

ストレンジャーとアルドールは動けない敵に詰め寄る。

「ちっ、仕方ない。」

敵は懐からトランシーバーを出した。

「全軍に告ぐ！　今回の計画は失敗だ！！　全員速やかに退却だ！！」

そういうとトランシーバーを地面に叩きつけ壊した。

「オマエ！！」
「残念だがしゃべることは無い！！！」

敵はそういい、体に取り付けてある自爆スイッチを押した。

ドカーーーーーーーーーーン！！！！

敵は自爆し、何も残らなかった。

「ちっ！　逃がしたか。」
「やられたわね。」

ソニック達はその場に立ったまま、爆発後とストレンジャーを見ていた。

敵は親玉からの命令で速やかに退散し、被害は最小限で済んだ。

ホテルへ戻ったソニック達一行。

「じゃあストレンジャー。」
「早速だが、教えてくれ。」
「さっきの人って。」

多目的ルームへ戻ったソニック達は早速、ストレンジャーに理由を聞いた。

「ああ、この際全部話すぜ。いいか？アルドール。」
「ええ、いいわ。」

アルドールは素直に聞き入れ、ストレンジャーにＯＫを出した。

「あれは、さっきの奴は、俺達がもともと住んでいた島を襲ったやつらなんだ。」
「！！！！」
「私達はもともといっしょの島に住んでいたの。テトラクリスタルアイランドに。」

ストレンジャーとアルドールは話し出した。

「テトラクリスタルアイランド。そこは、私達四神が住んでいる島。」
「本来他の島の人たちの干渉されないために結界が張られているんだ。」
「でも急にやってきたのがあの侵略軍。」
「彼らは私達四神を消し、力を得ようとしたの。」
「俺ら四神の使える力を。」
「私達四神がいるおかげで、今は方角と言うものが存在するの。」
「だが俺ら四神が全員いなくなると。世界の方角が無くなり、バランスが乱れ、世界が壊れる。」
「だが、侵略軍がやってきたが俺達はやられなかった。」
「島に用意してあった緊急脱出装置のおかげで。」
「そして脱出した俺達は個々で生活し始めた。」

「それで今の状態。」
「あの様子だと、俺達の一族は全員やられた。」
「だけど操る力は得られなかった。」
「ストレンジャーとアルドールが生きていたから。」

ソニックはそう言うとストレンジャーは頷いた。

「多分侵略軍がこの島に来た理由が別であったんだ。」
「別の理由・・・」
「私がここにいたから、ね。」

急に部屋の入り口が開き、ピーチ姫がやってきた。

「ピーチ姫、それってどういうこと？」

テイルスは聞いた。

「私には魔法が使えるの。それが私を連れ去る理由だと思う。」
「多分あの様子だとあいつらはピーチ姫が魔法を使える情報を入手して、この島にやってきたんだな。」
「そうだったんだ。」
「とりあえずピーチ姫、このままレースをやっていたら被害が大きくなってしまうかもしれない。レースを中断させてもらえないか？」
「ええ、わかりました。参加者の皆さんは私が直に話して、元いた場所に帰ってもらいます。」
「頼みます。」

ピーチ姫はソニック達に一礼し、部屋を後にした。

「とりあえず、俺達も島へ戻ろう。」
「それからやることがあるから。」
「わかったぜ、ストレンジャー」

ソニック達はホテルを後にした。すると館内放送が

『レースの参加者の皆さん、先ほどの事態でとても深刻な事へなりました。今回のレースは中止にし。皆様には私どもが直に、皆様がいた島へお送りします。４番ポートへ集合してください。』

　４番ポート

参加者のチームはそれぞれ４番ポートへ集合していた。
ソニック達もカレントへすでに乗り込み、ピーチ姫が来るのを待っていた。
しばらくするとピーチ姫が家来であるキノピオたちを連れてやってきた。

「皆様、まことに申し訳ありませんでした。私が原因である事態が起きてしまい、皆様にもしもの事があっては困ると思い自己判断で皆様をもといた島へお送りします。」
「どうして俺達が帰んなきゃ何ねーんだよ！！」
「そうよ！　原因が貴方なら貴方が行けばいいでしょ！！」

参加者の人たちがそれぞれ口々に言い始めた。

「皆さん落ち着いて」　「申し訳ありません！！」

キノピオが言うのを振り払い、ピーチ姫は頭を下げて謝った。

「確かに皆様の言うとおりです。私が何とかすればいい話でした。　ですが私はどうすることも出来なかったんです。」

ピーチ姫は謝りつつ言い出す。

「この事態に皆様を巻き込むわけに行かないんです。私も、私でなんとかします。お願いです。」
「姫・・・」

キノピオたちも頭を下げ謝った。

「そういうわけなんだ皆。」

ソニックが口火を切った。

「ピーチ姫だけではどうすることも出来ない自体が始まっている。姫は、自分のことよりまず、参加者である俺たちの非難を優先させたんだ。何でだかわかるか？」

ソニックは参加者達に言った。

「俺達が傷つくことを恐れているから、みんなの事を大事だからだ。自分以上に。」
「わかったよ。」
「そういうことなら仕方ないわね。」

参加者達はそれぞれ言った。

「ありがとうございます！」

そして、参加者の船はそれぞれ自分のもといた島へ戻っていった。

「皆さん、私を助けてくれただけでなく、協力までさせてしまって、申し訳ありませんでした。」
「コレくらいなんてこともないよ。」
「気にしないで、ピーチ姫。」
「ありがとうございます。みなさんも、これからお気をつけて。」
「ありがとうピーチ姫。」

ソニック達はもといた島へと帰っていった。

「みなさん、私達も帰りましょう。ソニックさん達に迷惑をかけないためにも。」

ピーチ姫は家来達を連れて、ホワイトアクロポリスからキノコ王国へ帰っていった。

ー　ＥＰＩＳＯＤＥ ＥＮＤ ー

ファニーカートグランプリ

http://p.booklog.jp/book/88793

著者：四神　夏菊
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/88793

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88793

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ